

進化経済学会・制度と統治の研究部会
@阪南大学

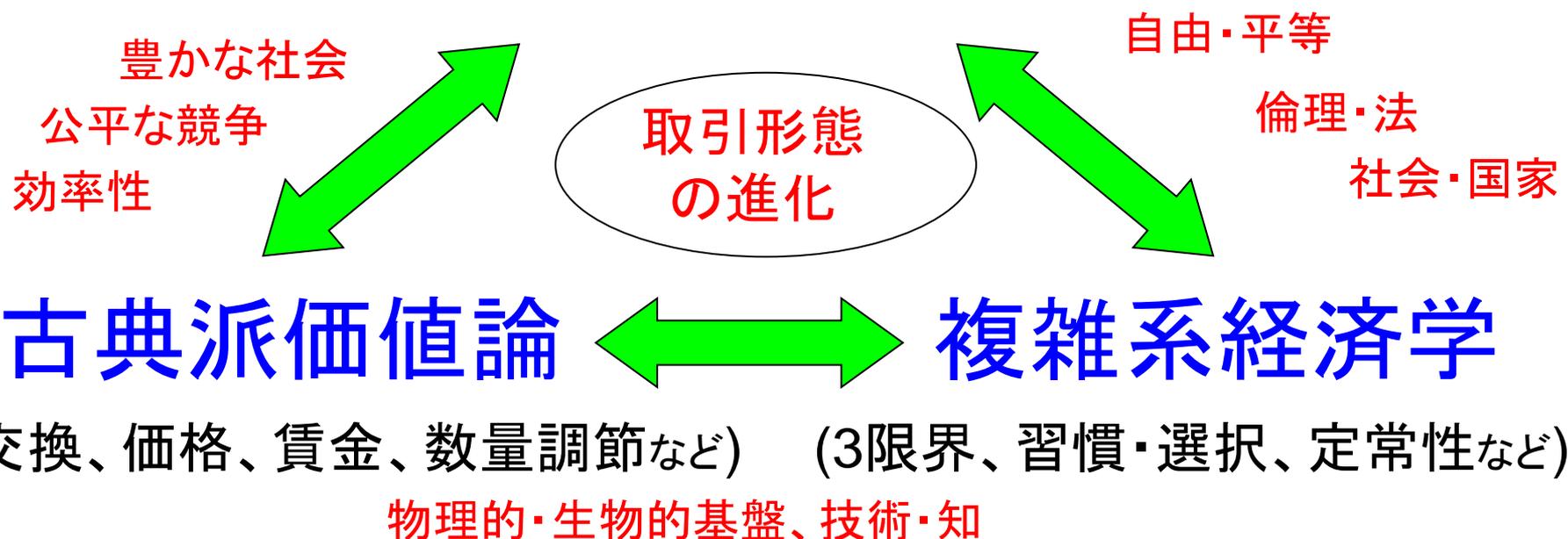
進化経済学の全体像と制度経済学の反省

塩沢由典
独立研究者

わたしの考える経済学体系

(7カテゴリーの進化、成長、定向進化、歴史など)

進化経済学



社会の合意？自生的秩序？

- メトロノームの同期32個(お茶の水大学
水口研究室)

[https://www.youtube.com/watch?v=JW
ToUATLGzs](https://www.youtube.com/watch?v=JWToUATLGzs)

- まずは、これを見てください。

制度派経済学への不満

● 制度派経済学

- 旧・新制度派、レギュレーション、進化、CIA、その他
- 共通点： 制度を重視する。中長期の視点。

● 新制度派

- 新古典派を承認、その基礎のうえにたつ。

● その他の制度派

- 新古典派に不満。○
- 短期の理論(日々行なわれる経済活動の分析理論)の不在 ×

デューイ哲学:経済学の方法として?(再掲)

- デューイの哲学的態度(Boisvert, 1998)
 - Plotinian T., Galilean P., Asomatic A.
 - D.は科学を支持するが、哲学の方法として拒否
 - 経済学は科学でなくてよいのか。
- 複雑系(Wiever 1948,塩沢『複雑系経済学入門』第5章)
 - 単純さの問題(19cまでの科学、少数変数間の因果)
 - 非組織的複雑さの問題(20c前半、統計・量子力学)
 - 組織的複雑さの問題(20c後半、1970年代以降)

理論の統一と整合性(再掲)

- M. Friedman(1951) 実証経済学の方法
 - 経済学の統一と整合性の追求を放棄
- Plotinusとわたし
 - P: 第一原理からすべてを導出(e.g デカルト)
 - S: 経験的事実から統一的な体系を目指す。
- 参考例: 現代物理学
 - 4つの力(重力、電磁気力、弱い力、強い力)
 - 統一(電弱理論)、大統一理論(強い力も)、しかし

超大統一問題(理論物理学の話題)

●4つの基本的な力

- 電磁気力、弱い力、強い力、重力
- W-S.: 電弱統一理論
- 現在: 大統一理論(電弱+強い力)
- 目指すところ: 重力を含めて統一

●個別理論と統一理論

- 個別理論も理論の統一も、ともに追及すべきこと
- Plotinian Temptation: 科学としては必要なこと
- Galean Purification: P.T.に抗する態度

経済学にとっての複雑さの意義

- 3つのレベルの複雑さの (『複雑さの帰結』プロローグ)
 - 対象の複雑さ
 - 行動主体にとっての複雑さ
 - 学問にとっての複雑さ
- Asomatic A. ⇒ 能力の限界(主体にとって)
- Galilean P. ⇒ 現象を(なるべく)純粹化された状況で観察・理解する。
- Plotinian T. ⇒ 最後は目指すべきところ

経済学の特殊問題

- 一般均衡理論(WalrasとArrow & Debreu)
 - すべての論文を「一般均衡」の枠に収める。
 - Plotinus的誘惑の虜 & M. Friedman
- 不必要な枠組み
 - Krugman: 新貿易理論
 - Melitz: 新新貿易理論
- 良い理論の保証ではない。
 - 動学的確率的一般均衡(DSGE)

すべてを一挙に説明する？

● Plotinian Temptationに陥っている。

- 経済：すべてがすべてに依存する。
- 正しいとしても、可能か。
- Walras 対 Marshall

● Galilean Purificationの必要

- 部分過程分析を積み重ねること
- 浅く広くでなく、深い分析・理解が必要

● 研究における分業と協業

経済学における分業と協業

●分業

- 方法: 理論、実証(実態研究)、歴史、
- 領域: 金融、国際、農業、社会保障、etc.
- 政策: マクロ経済政策(国単位)への集中は問題

●協業 理論と実証、理論・実証・政策

- 事実としての分業・協業だけでなく、もっと意識的に取り組むべきか。

時代に対峙する経済学

●「政策の違い」より根本的なもの

- 経済の見方、考え方
- これが根底から変わらないと、本当の意味で政策も変わらない。(Keyens:経済思想の虜、Aglietta:独裁的権力)

● New Consensus Macro

- 政策として無効(有害)だというだけでなく、理論として代替できるものが必要
- 理論の課題←理論の軽視?
- 制度派経済学: 制度を重視が理論軽視になっていないか。

「株主主権」にどう立ち向かうか

- 株式会社は、法的には株主のもの。
- 経済学的には?
 - 分配理論が関係
 - $Y = f(L, K) = (\partial f / \partial L) \cdot L + (\partial f / \partial K) \cdot K$
 - ソロー残差、成長会計? (合理的核はなにか)
 - Fの変化(生産性上昇)への貢献は?
 - 設備投資の影響は一部
 - 現場に働く人たちのチームワーク

基礎となる経済理論

- ワルラス的均衡理論か、別の何かか
- Bowles『ミクロ経済学』
 - ポスト・ワルラシアン of 進化社会科学
 - 「ポスト」の意味? 価格理論ではワルラスでよい?
- より根本的問題
 - Cartelier (植村・磯谷・海老塚の囲み記事より)
 - 個人の意思決定の自律性と個人行動の協調の特殊な様式を同時に含む、(たとえば、法と慣習に基礎を置く社会とは異なった) 商品的 (marchande) 社会分業に基礎を置く社会の可能性の条件とは何であるのか。
 - S. Bowles、F. Hahnも
- この問題に積極的に答えられる体系か?

Aggliettaの批判

- But their essential unity is often inadequately grasped by contemporary universe of the very theory they are seeking radically to criticize. The greater part of the time they [critics] use the language of this theory, ...or at best merely questions the correspondence of orthodox theory to reality. What is seldom challenged, however, is the logic by which the concepts of the theory are developed. (Introduction, p.9)
- If this theory has exercised such a dictatorship over economic thought, it is because it supplies a reassuring vision of society and justification for the profession of economist. General equilibrium is seductive because ... (p.10)
- Boyerの無用心 塩沢・有賀(2014)第2章 岩田(2008)

答える理論: 谷口・森岡理論

- 自分の製品に表明された過去の需要しか知らない生産者たちが、需要の緩やかな変化に対応する供給ができる。
- 生産期間の数期の平均をとり予想在庫量を調節する。
- 強いところ
 - 取引市場の「競り人」は不要。
 - 視野・合理性・働きかけの限界をもつ人間が判断
- Springer: Microfoundations of Evolutionary Economics

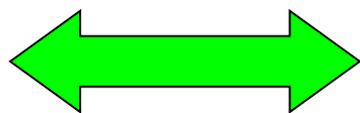
わたしの考える経済学体系(再)

(7カテゴリーの進化、成長、定向進化、歴史など)

進化経済学



古典派価値論



複雑系経済学

(交換、価格、賃金、数量調節など)

(3限界、習慣・選択、定常性など)

物理的・生物的基盤、技術・知

複雑系経済学(1)

● Santa Fe系の複雑系経済学

- Bowles: 複雑さの問題が分かっていない。
- B. Arthur: 人間行動まで切り込んでいない。

● わたしの複雑系経済学

- 人間 視野・合理性・働きかけの3つの限界
- システム 定常過程、切り離し機構、生存のゆとり
- 両者の相互作用⇒ミクロ・マクロ・ループ
- 定型行動(ルーティン、If-then行動)

複雑系経済学(2)

- 進化経済学の基礎理論
- 経済行動の理論(定型行動、 $qSS'q'$)
 - If-then行動 (J. Holland⇒西部・吉田)
 - CD変換 (認知的意味⇒指令的意味)
 - ◆ Peirce の Interpretant ⇒ 吉田民人
 - 重要なこと
 - ◆ Cの構造 少数の変数、パターン(ゴミ箱理論)、etc.
 - ◆ Dの構造 働きかけの限界の内部
 - このよう行動の普遍性

進化経済学

- 方法: 進化という観点から経済を見る。
- なぜ新古典派より優れた方法か。
 - 「進化するもの」みてよりよく理解するもの多数
 - 商品、技術、行動、制度、組織、システム、知識
- 「進化するもの」の判断基準
 - Hodgesonら ①複製 ②変異 ③選択
 - 経営学、私 ①保持 ②変異 ③選択
 - 生物進化論をすべてまねる必要はない。

古典派価値論

● 基本はフルコスト原理

- リカード、オクスフォード調査、スラッフア、...
- リカード: Mr. Malthus appears to think that it is a part of my doctrine, that the cost and value of a thing should be the same;—it is, if he means by cost, “cost of production” including profits. (第3?版注)

● 上乗せ率はどう決まるか(塩沢, 1985;2014)

- 「上乗せ価格を帰結する複占競争」(いちぶ証明を修正して塩沢2014に収録)
- 慣習だけではない。 ■ 市場の競争状態と原価比

理論の妥当範囲

● 妥当範囲の明確でない理論

- 科学理論としては不十分
- 電磁気学で重力現象(Black hole、重力波)は説明できない。

● フルコスト原理の妥当する商品

- (固定費を除き)費用が比例的⇒原価、単位費用
- 設定した価格で販売する。⇒生産量の調節が容易(低い調整費用、早い調整)
- 農業製品、鉄鋼などはのぞかれる。(市況商品)

古典派価値論/概成領域・未完領域

●5つの理論領域

- ◎国内価値論
- 地代論・枯渇資源論
- ◎国際価値論
- ×労働市場論
- ×金融経済論

●今後の努力方向

- 概成領域を発展
- 未完領域の理論化

金融経済論(1) だめなところ

- 従来の金融論(銀行制度、歴史、ect.)
- マクロ経済学 (金融政策に過剰の期待)
 - テイラー・ルール 政策のルールが理論?
 - 流動性選好、流動性の罫?
 - Wicksell connection (Keynes, Hayek, ect.)
 - 効果がないと見極めるべし。
- 貨幣の起源、本質論

金融経済論(2) 材料になりうるところ

- アベノミクス(無謀な実験に感謝)
- 内生的貨幣供給論(Circulationistも)
- 時系列分析
 - Fama, Shiller, 経済物理(Mantegnaほか)
 - 「効率市場仮説」:情報の効率性に関するものとみれば正しい。経済が効率的ではない。
- Financial fragility, Orléan, etc.
- 金融工学(個別主体の行動論)

労働市場論(1)

- 「労働市場」論でよい？
- 労働条件等の交渉
- コモンズの「適正価格」
- 分配理論の(再/新)構築
- 参考: 生産性三原則 ⇔ 株主主権
 - ①雇用の維持拡大
 - ②労使の協力と協議
 - ③成果の公正な分配

労働市場論(2)

- 労働力の「再生産費」説はとらない。
 - 生産期間が長い。■供給者は資本家ではない。
- 他の理論領域との関係
 - 実質賃金率は、労働市場ではきまらない。
 - 国内価値論にとっては、相対賃金の比率さえ決まればよい。(最小価格定理が成立)
- 異なる労働力の相対賃金はなにが決めるか？ 需給論だけでよいか。

失われた25年について

●1992-2016 政策で見ると

- 90年代 ケインズ政策(宮沢喜一)

- 00年代 小泉改革(規制緩和)

- 10年代 アベノミクス(3年間)

●より大きな政策転換が求められている。

●古典派価値論は、この間の賃金の動きをどう捉えるか

賃金率はなぜ停滞したか。

●捉えるべき事実

- 生産性は上昇した。(↔林・プレスコットの誤り)
- 生産性本部の「生産性」は、指数。付加価値/労働者数。(物的)生産性=産出量/実労働時間
- 賃金は据え置かれるか、低下した(個人vs.平均)
- 物価は、不変かやや低落(デフレ不況ではない)。

●制度分析では

- 賃金制度、雇用制度の変化(宇二宏幸)

賃金停滞:古典派価値論の説明(1)

● 基本的事実 中国の改革開放

◆ 資本主義化と国際市場への参入

● 日中の賃金率比

- 1990年代 平均20倍>現在10倍・都市部5倍
- 国際価値論 なぜこのような賃金格差があった/あるのか。

● 上乗せ率への影響

- 市場の競争状態(需要者側の価格比への敏感度)
- 原価が異なる場合⇒同じ上乗せ率は設定できない。
- 高い企業は低めに設定(事実ではなく、理論として)

賃金停滞:古典派価値論の説明(2)

●日本の輸出企業・輸入競合企業

■競合しない製品⇒製品開発力

◆プロセスI.は得意だが、製品I.は不得手

■価格競争⇒原価の削減

◆投入財の原価・投入係数は日中であまり変わらない。

◆生産性(労働投入係数の逆数)を小さくする。

◆かなりの生産性上昇はあったが、製品価格抑制へ

◆円建てかドル建てか(日本の物価はドル換算では2012年末まで上昇)

■海外進出(=国内生産の縮小)

制度分析と進化経済学

- 環境が制度変化を要請する面がある。
 - 労使交渉の主題(賃上げよりも雇用確保)
 - 政治: 非正規雇用の容認
- 中長期の技術変化
 - 短期の選択(採算、需要の伸び)の積み重ね
 - ペレスのダイナミック産業論(横川信治)
 - 動学的比較優位論
 - ◆ 短期(5年程度)の比較優位の経路の現象論
 - 短期理論(日々の経済活動の分析理論)が必要

国際価値論・補足

● 途上国の経済発展戦略

- 従属理論(交易条件、不等価交換論 ×)
- 資本集約的vs.労働集約的産業
 - ◆ Rowthorn: インドは労働集約型を × (HO理論の発想)
 - ◆ ICT: 十分な数のICT技術者⇒同一財での原価競争

● 経済発展の目標

- 1人当たりのGDP⇒実質賃金
- 生産技術体系(投入係数)の向上
- 投入係数には、制度や社会インフラが関係する。

まとめ:

- 制度の真に進化論的分析を
 - 制度変化⇒経済状況
 - 経済状況(環境)⇒制度変化
 - 経済の変化は、短期の選択の積み重ね
- 中間理論(制度+傾向分析)には限界
- より深い理論分析が必要
 - レギュレーション・アプローチの40年?
 - 理論は自動的にには出てこない。